

所 陵

No. 85

[SENRYO/KANSAI UNIVERSITY MUSEUM REPORT]



鳩の彫刻

● 目 次 ●

壺を祀る	黒田 一充	2
地域の誇りを展示できる幸運 —福岡県東峰村の例—	黒木 貴一	4
近世後期洒落本から見た敬語の地域差	森 勇太	6
わが国の近代水道の父 吉村長策	石田 成年	8
西宮市立郷土資料館所蔵の高畑町遺跡出土木製品		
—奈良時代井戸 417HW と付札木簡—	森下 真企	10
村野藤吾による関西大学千里山キャンパスにおける		
アンビルト建築について	西田 貫人	12

関西大学博物館

〒564-8680 大阪府吹田市山手町3丁目3番35号

Tel. 06-6368-1171 (直通) Fax. 06-6388-9928

<https://www.kansai-u.ac.jp/Museum/>

壺を祀る

黒田 一 充

神社の氏子の中から交代で当番を決めて祭りの準備や主宰する役をトウヤとよび、頭屋・当屋などの漢字が当てられる。トウヤの中には、祭りの際に祭神の神霊を迎える所も多く、中には交代してから1年間自宅に祀る所もある。

奈良県天理市萱生は、大和神社の9つある氏子地区のひとつだが、11月の引き継ぎから1年間、床の間のオヤカタに神霊を迎えて毎日お供えをする（写真1）。大和神社では、この萱生と長柄（オヤシロとよぶ）だけが1年間祀り、他の地区は4月のちゃんちゃん祭りの宵宮に大きな御幣（産子幣）を迎えるだけだが、4地区では門口に小祠を祀っており、他にも1年間祀った所があったのかもしれない。

神社とは関係なく、交代で御神体を祀る所もある。天理市遠田町と西隣の田原本町^{ためがわ}為川、蔵堂では、明神さんとよぶ壺を順番に受け渡して祀っている。この壺は、江戸時代に造られた遠田池の南西隅で、3地区の境界にあたる場所から出土したと伝えられている。

為川南方では、現在8軒が明神講を組織している。3年ごとの10月11日に壺を迎えるが、当屋宅では竹と杉葉で高さ約55センチメートルのオヤカタを作る（写真2）。底面はなく、4脚の台に載せた壺の上からかぶせて床の間に祀る。竹と杉葉を用いた仮設の祠は、奈良県内でも少なくなっており、古からの信仰が守り伝えられている。

無事に壺を迎えると、講員の男性たちが集まって会食をする。餅

を入れた白味噌の雑煮や、里芋の煮ころがしが振る舞われる。

翌年、蔵堂への引き継ぎの際に壺を取り出し、襷掛けした晒に台の脚を引っかけ両手で支え、壺の上部に家紋入りの掛袱紗を覆って運ぶ。本来は、壺の出土伝承地で引き継ぐのだが、現在は蔵堂との境界になっている。打ち合わせの時間に蔵堂の人たちが出迎えに来ており、無言で壺を渡す（写真3）。

当屋宅に着くと、木製のオヤカタを上からかぶせ、「すこんとさん」とよんで床の間で祀る（写真4）。蔵堂の講は、14軒で構成され、3軒ずつ5つの組で当屋を廻している。会食では赤飯が振る舞われ、里芋はない。

その翌年は、遠田池の南西隅で渡され、池の西側を流れる用水路の野道を通って遠田の集落へ運ばれる。遠田ではスコンドウ講とよばれ、現在は8軒になっている。壺はオヤカタに納めず、横に並べて祀られているが、いつからこのようになったのかは伝わっていない（写真5）。遠田でも、壺が廻ってくると講員の男性たちが集まる。里芋の田楽を振る舞うことから、芋食い講ともよばれる。

この講については、辻本好孝が『和州祭礼記』（1944年）にまとめた「遠田、為川、蔵堂の数献當講」が、一番古い報告である。そこには50貫余（約190キログラム）の里芋を炊いたとあるが、現在は少なくなっている。当屋は一

写真1 萱生のオヤカタ（2015年）



写真1 萱生のオヤカタ（2015年）



写真2 為川南方のオヤカタ（2018年）



写真3 為川から蔵堂への引き継ぎ (2018年)

度つとめると、次にその家に廻って来たときは子どもか孫の男子に交代するが、講の集まりには、すでに当屋をつとめた長老も出席し、年齢順に講員がすわる。「数献」は盃事のことだと思われ、ひとりずつに盃事を行ったが、今は最長老だけになっている。一年間壺を祀り、翌年再び出土伝承地で為川に渡されて、一巡する。

写真のように、御神体は素焼きの壺だが、出土したという割に、新しいもののような印象を受ける。『和州祭礼記』には、1尺3寸(約40センチメートル)とあるのに対し、現在の壺の高さは約28センチメートルであり、出土したものではない可能性がある。蓋があるため中は見えないが、内部に何か入っており、出土した壺の破片かもしれない。

奈良盆地は水田が広がっているが、河川が限られ、江戸時代には川からの水を引くために村同士が争いをした。そのために溜め池を造る村が多かった。『改訂天理市史 史料編第3巻』収録の遠田町区有文書によると、遠田池の造成は明暦2年(1656)で、四角い池にするため遠田村は為川村や蔵堂村と土地の交換をした。しかし、蔵堂村と交換する土地が足りず、不足分の土地(池床)の年貢米を毎年遠田村が納める



写真5 遠田のオヤカタと壺形土器 (2019年)



写真4 蔵堂のオヤカタ (2018年)

ことで妥協した。今回の調査で、蔵堂と遠田に講の保管文書が残っていることがわかり、見せていただいた。蔵堂の文政6年(1823)から書き継がれた『素献當明神講帳』には、講員の名前や当屋を受ける予定のほか、費用の明細が記されている。そこには、遠田村から池床の年貢米が明治の半ばまで支払われ、その3年分を使って講の費用に充てたという。明神講が、遠田池の造成と深く関わっていたことがわかる。

遠田の文書は、「数講當」あるいは「座并次第帳」と記され、宝暦9年(1759)からの記録が残っている。座並(并)びは講員の並び順で、3年ごとに壺が廻ってくると当屋宅に集まり、まずその時点の講員を確認し、年齢順に名前を書き記してから会食に移ったようである。

おそらくこの講は遠田池を造った際に関わった家で構成され、池から水を引く権利(水利)を持っていた。池の水が枯れないように明神さんを祀り、権利を持つ家の人だけが会食に出席できた。その資格を持つ家を、明神さんのオヤカタの前で毎回再確認したのである。

座並びに載る資格がある人は名前人とよばれたが、水は家の田に引くため、最初のころの文書には夫を亡くした妻の名前が年齢順に記されていた。しかし時代が下るにつれて末尾に移り、幕末には資格はあっても後継ぎの男子が成人するまで会食に出ることが許されず、男性だけが参加するようになった。その一方で、夫たちの会食の後、妻たちが集まる会が開かれたことが、記録に見えるようになる。

池の水利をめぐる信仰は、米作りに必要な水の確保がいかに大切だったかを伝えている。

参考文献：黒田一充「遠田・為川・蔵堂のスコンドウ講」
 (『天理市文化財調査年報 令和元(2019)年度』
 天理市教育委員会、2021年)

関西大学文学部教授

地域の誇りを展示できる幸運—福岡県東峰村の例—

黒木 貴一

余暇活動や学会などの出張の合間に博物館・資料館を訪問して、地域の歴史、資源、自然などを知らしめる機会が多い。そのような施設訪問時には、必ずパンフレットを頂戴し、特に印象深い時には図録を購入して後日楽しむに止まらず、その内容を講義などの授業にフィードバックすることを心掛ける。手元に残るそれらパンフレットは、北海道・東北で33（福島県小野新町のリカちゃんキャッスルなど）、東京で28（北区のお札と切手の博物館など）、東京以外の関東地方で38（茨城県小川町の納豆博物館など）、近畿で30（大阪府豊中市のインスタントラーメン発明記念館など）、中国・四国で30（島根県出雲市の宍道湖自然館ゴビウスなど）などを残しているが、眺めれば訪問時に見た展示物など場の記憶が蘇る。

それら展示物には、その年代や形状、学芸員の有無、公共か私設か、教育か企業宣伝などによって展示方法に相当の違いが見られる。たゞいづれも、その地域で人々が、育み、営むことで支持されてきた文化が顕在化されたという共通性がある。つまり施設には地域に根ざして共に歩む姿が必ず垣間見えるので、その展示物は地域の誇りとも言えよう。考えてみれば、展示物は、その価値がまず認識された後に、展示可能な条件が整って初めて生きてくる。恥ずかしながら数年前までは、展示される以前の、その価値を示すまでに捧げた人々の努力や工夫、そしてその幸運に思いを馳せることは無かった。しかし2017年7月九州豪雨の災害調査後に従事した業務を通して、価値の確定までに努力、工夫、幸運があることを体感し、博物館・資料館の有難さがより心に刻み込まれた。以下、その事例を紹介する。

九州豪雨では、福岡県朝倉市東部にある東峰村で、僅か1日に800mm以上の降雨があり山地での斜面崩壊に加え低地では土石流にともなう河岸侵食が多く生じた。その侵食で河岸に露頭が生じ、そこに偶然水田の僅か2m程下位に



写真1 河岸侵食の現場状況

巨木の一部が現れた（写真1）。巨木が直径約70cmで周囲が少し焼けて黒ずんでいる。その出現状況を、土石流で運搬された流木ではなく、“尋常ではない何か”と気付いたのは、幸運にも日頃より樹木に慣れ親しむ造園業を営む水田所有者だった。その異常な巨木は当村教育委員会の知る所となり、情報は福岡県まで流れた。その頃、地質学者の知人が概査を進め、それが約9万年前の阿蘇4火砕流の直撃を受けた埋没樹木の可能性の高いことが分かった（図1）。既にその情報は文化庁にまで及び、補助金による学術調査が実施される運びとなった。この時期から筆者は調査に参加している。

調査は、踏査による地質確認、ドローンでの地形モデル作成、衛星データによる阿蘇から現地までの地形・植生解析、詳細なDEMによる火砕流の地形判読など、相応の時間を費やして慎重に行われた。その他、トレンチ調査や露頭資料による火山灰分析や花粉分析も実施され、9万年前の寒冷な時期に阿蘇4火砕流に直撃されそのまま埋没した樹木であることが確認された。この間、トレンチ現場の水田は休耕を強いられたが、村の文化財誕生への期待を共有いただいた所有者から、惜しめない協力を頂戴した。

図2は、ドローンで撮影した空中写真から作成したトレンチ現場の三次元モデルを示す。そしてトレンチの周囲の旗1～6がGCPを示す。



図1 東峰村と阿蘇山との位置関係
背景は地理院地図

トレンチはまず土層を確保した上で約1 m掘り、推定した樹木位置でさらに1 m掘り下げた。そこで樹木状況を観察し、さらに樹木と基盤・砂礫層との関係を確認した。

この調査は、埋没樹木と阿蘇4火砕流に止まらずその周辺環境との関係も明らかにし、埋没樹木を核とする全体の普遍的な価値を示す目的で回数を重ねた。その結果は推敲を経て修正の繰り返された図表や文章となり、複数回の校正

を経て報告書¹⁾にまとめられた。その成果は第5章の総括文、「阿蘇4火砕流堆積物と地域の人々の生活や文化には強い関連がある。自然災害の痕跡と地域文化の成り立ちや特徴を示す貴重な地域教材としても利用できる」、「露頭や埋没樹木などは、阿蘇4火砕流と拡散のプロセスを示す重要な学術資料としての価値がある」に凝縮されている。

そして文化財保護法に基づき「阿蘇4火砕流堆積物及び埋没樹木」は天然記念物に指定され、2022年3月に官報に掲載された。豪雨で甚大な被害を受けた人口僅か約2000人の東峰村に、その復旧の力となる文化財が誕生した瞬間だった。報告書ではまた、この天然記念物を中心としたフィールドミュージアムとしての教育活用を展望しているが、現在、村は保存と活用に向けた本格的な検討を開始した段階にある。近い将来、適切な手段による新文化財の展示が始まることを期待している。

自身は今、コロナ禍中の異動後2年になるが、地域の誇りを展示できる幸運を持つ、本学博物館の存在を思い、関西大学に奉職できる幸せを感じるばかりである。

【参考文献】

- 1) 東峰村教育委員会 (2021)：東峰村の阿蘇4火砕流堆積物及び埋没樹木発掘調査報告書。東峰村文化財調査報告書、第5集、58p。

関西大学文学部教授

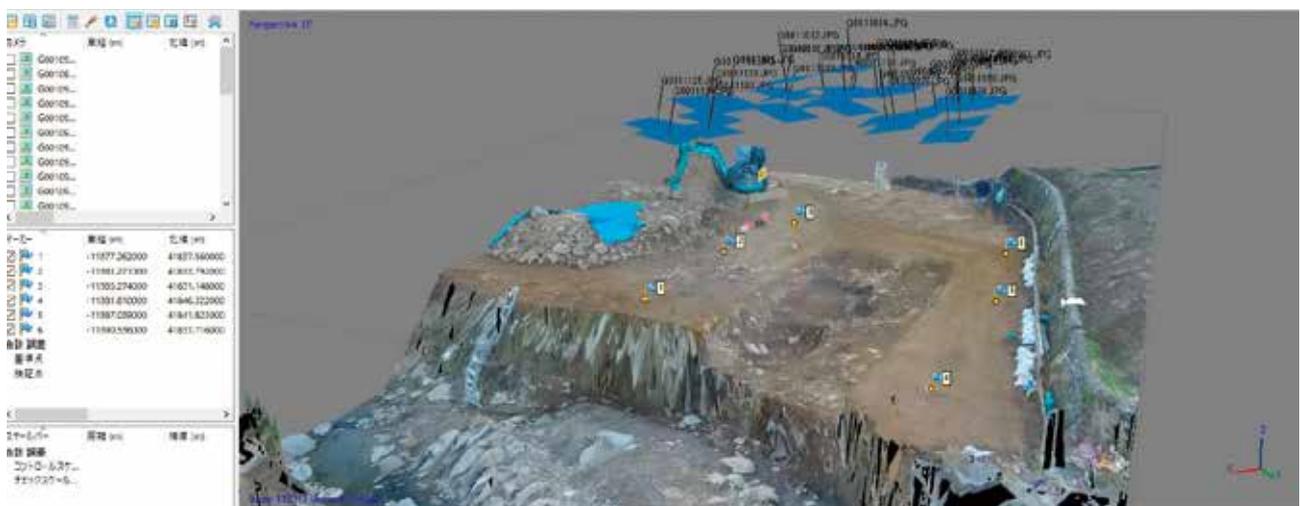


図2 トレンチ現場の3Dイメージ

近世後期洒落本から見た敬語の地域差

森 勇 太

洒落本による近世後期日本語研究

洒落本は、“延享年間（1744～1748）から文政年間（1818～1830）にかけて、初めは上方、後には江戸を中心に刊行された一種の遊里小説”である。体裁は、“会話文体によって遊里を描”いた（「洒落本」『日本語学研究事典』、明治書院、鈴木丹士郎氏執筆）ものとされる。図1『聖遊郭』では、発話冒頭に▲という話者の注記があり、図2『傾城買二筋道』でも発話冒頭に、話者が四角で囲まれて表示されている。演劇の台本のような体裁で、会話を連ねた形で遊里の様子が描かれている。このような点から洒落本は、近世後期の話し言葉研究において重要な位置づけを占めてきた。

もちろん、遊里のことばがそのまま市井で使われているとするのは早計である。日本語史研究でも、「遊里語」と呼ばれる、遊里特有のことばづかいがあることが知られており、「なんす」や「ありんす」などの敬語形式はその代表

格である。しかし、遊里語は接客で用いられたものであり、著しく失礼な印象を与える言葉遣いを遊女が選択するとも考えにくい。遊里語が方言の矯正として用いられたという指摘もあり、敬語の使い方については、一定程度市井の言語と連続していたと想定されよう。

また、洒落本の重要性として、刊行された地域が多様である点も見逃せない。洒落本は、京都・大坂・尾張・江戸で一定数刊行されている。このような地域的多様性は、近世期の方言差がどのように成立し、現代までに至っているか、という問題を考える有力な手がかりである。

敬語の運用の地域差

筆者は、近世期の洒落本における依頼・命令表現に使われている敬語を対象として、京都・大坂・尾張・江戸を対照させる形で調査を進めた。調査の詳細は森（2019）を参照されたいが、ここでは上方（京・大坂）と江戸の対比に注目して、概要のみ述べる。

まず、京都・大坂・江戸の洒落本から、遊女から客へ用いられている依頼・命令表現を抽出した。それらの表現を敬語の有無の観点から以下の3つのグループに分ける。

- ①非敬語形＝尊敬語を用いない形式群。
- ②オ形＝尊敬語オ（のみ）を用いた形式群。
- ③敬語形＝オ以外の尊敬語を用いた形式群。

そして、各地域で①②③の表現がどのくらい見られるかを計量した。話し手と聞き手の関係を固定しているため、①②③の割合に地域差があるとすると、各地域の敬語の運用の特徴が現れている可能性がある。

まず、京都・大坂について、①②③それぞれに一定数使用例があり、多様な形式を用いていた。客に対しても（1）のように①非敬語形や、（2）のように②オ形を使うことが特徴的である。

- （1）「いきたいなア。つれてゆき。」（芝居に）行きたいなあ、連れて行け、①非敬

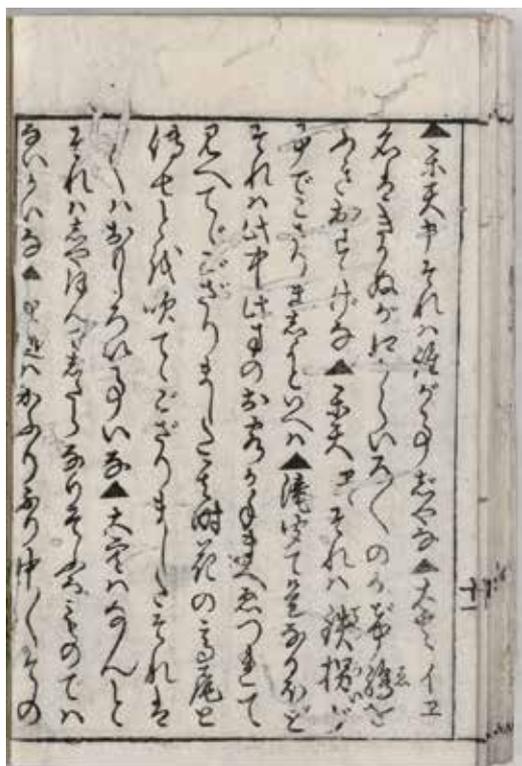


図1 『聖遊郭』（国立国語研究所蔵、11ウ）

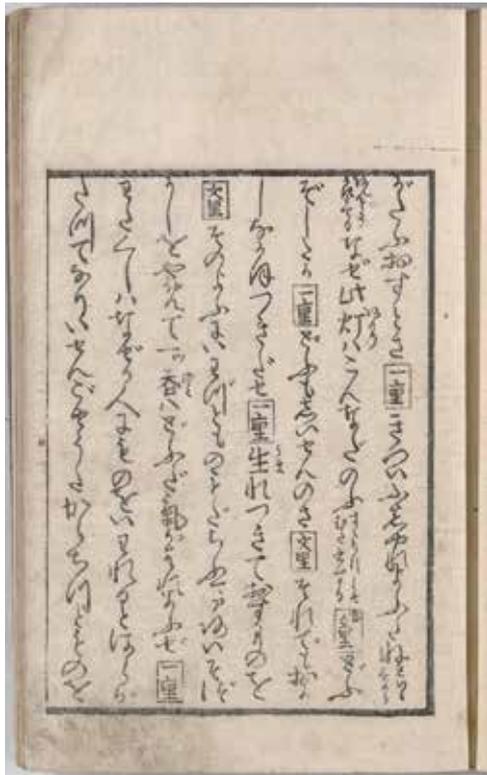


図2 『傾城買二筋道』(国立国語研究所蔵、17才)

語形) (風流裸人形、京都)

(2)「ちとすなほにうけておくれいな」(ちょっと素直に(酒)を受けておくれ、②オ形) (風流裸人形、京都)

ところが、江戸はほとんどが(3)のような③敬語形であった。

(3)「ちつとましにもおなんなんし。」(ちょっとましにおなりなさい、③敬語形) (傾城買杓子木、江戸)

江戸では、遊女は客を目上の人物として、目下に対する話しことばとは切り替えて、敬語を固定的に徹底して用いる傾向がある。それに対し、上方は敬語の使用・不使用が流動的で、相手との距離感の調整や発話意図の異なりを、敬語の使用・不使用で表現していると読み取れる。

このことは、丁寧語の使用にも見て取れる。現代語の会話では、目上の人物と話すときには、基本的にすべての文末で丁寧語「です」・「ます」を付す。筆者が近世期の遊女から客への丁寧語の使用を調査したところ、江戸は、特に1800年以降の作品で、文末に徹底して丁寧語を用いる話者が多い。しかし、上方は文末に徹底して丁寧語を用いる話者が少なかった。これ

も敬語の運用について、江戸は固定的、上方は流動的という差異が現れている。

地域差の要因

このような地域差は近世期における社会変化から導かれたものであろう。江戸は、近世期に政治・文化の中心となった。江戸はもともと敬語のない地域に、上方の敬語を導入してそれが体系化された。つまり、江戸において敬語とは、共通語として、目上の人物と話すときに、相手に失礼のないように話していることを明示する役割をもつ。従って、依頼・命令表現のほとんどが③敬語形であったり、丁寧語の文末が徹底されたりといった運用が見られることになる。

一方で、京・大坂では、日常語のレベルに敬語があり、敬語によって丁寧さや親しさを示しながら対人距離を良好に保つ。単に待遇的に違反しないことだけでなく、相手を遠ざけすぎず、親しみを示すことも重要なことである。また、近世後期には政治・文化の中心を江戸に譲るなかで、上方のことばが地域語となるが、流動性の少ない地域社会の中で、共通語的な、固定的な敬語使用は必要とされなかったのであろう。この敬語の地域差は、現代の地域差にも連続するものである。

近世期の言語研究自体は多数の蓄積があるが、本稿のように地域差やその成立過程を明らかにしようとした研究は多くない。洒落本資料は、国立国語研究所の「日本語歴史コーパス」にも多数作品が収録され、簡便に調査ができる環境が整いつつある。文学研究・歴史研究と協同して、社会のさまざまな層のことばを映し出すような、新たな展開が期待される。

図版出典

図1・図2ともに人間文化研究機構国立国語研究所「日本語史研究資料[国立国語研究所蔵]」
<https://dglb01.ninjal.ac.jp/ninjal/>

参考文献

森勇太(2019)「近世後期洒落本に見る行為指示表現の地域差—京・大坂・尾張・江戸の対照—」『日本語の研究』15-2, pp.69-85、日本語学会

関西大学文学部教授

わが国の近代水道の父 吉村長策

石田成年

わが国の開国は安政5（1858）年、五カ国修好通商条約が締結されたことによる。交易と海外文化の受容が隆盛する一方、外国船の寄港でもたらされた伝染病が大流行し衛生環境の改善が急務であった。特に水道が重要視され、港湾都市として栄えてきた横浜、函館、長崎から全国に広がっていった。上下水道整備は本来は近代的な公衆衛生の考え方をもとに疫病対策の一環として行われてきたのである。

わが国の水道黎明期の技術者の一人に吉村長策がいる。万延元（1860）年3月18日、西尾家の次男として国分村（現在の大阪府柏原市）に生まれた。後に大和国穴虫「吉村」家の亡名跡を継ぐ。この西尾家は架橋事業、地元銀行設立、郷学校の創設といった地域の社会基盤整備に尽力し当地においては中心的な存在であった。長策は工部大学校を首席で卒業した後、工部大学校助教授を経て明治19（1886）年には長崎県への出向となる。

長崎では第1次長崎港改修工事が明治15（1882）年から26（1893）年まで実施され、長崎港に注ぐ中島川変流工事が長策の土木技術者としてのスタートとなった。そして明治22（1889）年、水道創設事業として本河内高部堰堤の建設に着手し、明治24（1891）年に日本最初の近代水道ダムとして完成をみる。導水トン

ネルを囲み、堰堤の上部まで一直線に伸びた管理用階段を配置するなど、気の利いたデザインが施されている。さらに市域拡張に伴う人口増加により水不足が懸念され、長崎市第1次水道拡張事業として明治36（1903）年に本河内低部堰堤が竣工。これはコンクリート造としては神戸水道に次いでわが国で2番目に造られた水道ダムである。

この長崎での水道創設工事については膨大な予算額に理解が得られず議会が紛糾し着工までに年月を要した。それを待つ間、佐世保では明治22（1889）年、鎮守府が開庁すると同時に湧水を利用した佐世保軍用水道創設工事（郭公藪水源地、矢岳貯水場）も着工し、12月に竣工する。実のところ長策の水道技術者としての最初の仕事は佐世保にあったのである。

明治33（1900）年には水不足解消のため農業用溜池を改造した岡本貯水池が完成する。第2貯水池は円形となっており、古代ローマの建造物を思わせる。さらに日露戦争以後には海軍施設の増強とともに水道施設の拡張が図られた。そこで建設されたのが山ノ田浄水場である。明治41（1908）年、全国で10番目となる市による通水が完成し、長策が心を痛めていた軍から住民への「もらい水」が解消したのである。砂倉庫や浮彫を多用した装飾的な量水池上屋等、明治の建物の様式を残している。長策はここに吉野から取り寄せた1万本の桜を植え、吉野山のように佐世保市民にとって桜の名所となることを望んだという。

これらを含め、佐世保軍用（明治22）、長崎



吉村長策（明治44、西尾寛一氏所蔵）



岡本貯水池（明治33、佐世保市提供）

(明治24)、大阪(明治28)、広島軍用(明治31)、神戸(明治33)、舞鶴軍用(明治34)、岡山(明治38)、福岡(明治39)、門司(明治45)、小倉(大正2)、長野(大正4)、呉(大正7)、福山(大正14)と水道技術者としての手腕を発揮していくのである。

土木工事においても特筆すべき業績がある。「明治時代における海軍最大の土木工事」と評される立神係船池の建設である。この時長策は佐世保鎮守府建築科長であった。かつての佐世保海軍工廠、現在の佐世保重工業から佐世保湾に突き出した凹字状の修理艦船繫留場である。岸壁は高さ15m、南北576m、東西364m、総延長1,699mにも及び、明治38年(1905)の起工から大正5(1916)年の完成まで11年に及ぶ大事業であった。真島健三郎主任技師による耐海水コンクリートの確立も技術的に大きく評価され、コンクリート構造物の本格的な海洋進出の画期となった。大正2(1913)年にはイギリス製250tクレーンも完成し、名実ともに東洋一となる大係船池の建設に携わったのである。



立神係船池(大正5)

昭和3(1928)年11月21日、長策は東京で亡くなる。墓は佐世保市八幡町の西方寺にあり、佐世保の市街地を望むことができる。そのデザインは「近代水道の父」の称号にふさわしく、平面が六角形で上部は円頭状を呈し、水道施設を想起させる。正面には大きく「吉村家之墓」と文字が刻まれ、背面には納骨室への金属製の扉が取り付けられている。他の4面には6枚の石板を嵌め込み、うち1面には長策、妻、そして早世した子供たちの名を刻む。

「佐世保の港が見える場所に骨を埋めてほしい」。これは長策の遺言とされ、それに基づき墓所が建立されたと考えられていた。しかし河内国分の生家には実兄に宛てた大正9年4月27日付けの手紙があり「来ル六月亡妻ノ一周忌、

且ツ故人ノ遺志ニ基キ過日出張之節佐世保市之墓地ヲ撰定シ、納骨堂建築ニ着工シ」と記されている。妻登喜子は、大正8年6月16日に亡くなっており、佐世保を訪問した長策が1周忌を機に選地したのが事実のようである。長策がこの世を去るのはその8年後である。

長策の初めての赴任地長崎においては水道整備事業について議会が紛糾し着工までには年月を要した。それを待つ間、長策は佐世保で水道とともに道路整備も手がけていた。後年、その道を通して長女が松浦家へ嫁いでいくという縁。明治44年に佐世保を離れながらも、夫婦の佐世保への愛着は深まっていったのであろう。吉村家の永眠の地として佐世保を選んだのは当然のことであった。佐世保では街の近代化の功労者として必ず長策の名が上がり、市の広報誌や刊行物では何度もその業績が紹介されている。また日本遺産「鎮守府 横須賀・呉・佐世保・舞鶴～日本近代化の躍動を体感できるまち～」では作品が構成文化財に名を連ねている。

来たる2028年11月21日には没100周年を迎える。長策の技術者としての業績と評価は既に広く知られているところであるが、この佐世保の地でさらに長策自身の人となり、夫として父としての姿にも近づきたく思う。



吉村家墓所(佐世保市西方寺)

吉村長策「我が四十年間に於ける技術界の回顧」『土木学会誌』13巻1号 昭和2年

中田町子「上水道の父・吉村長策」『郷土雑誌 虹』170号 昭和41年

吉村直樹『水の道をたどる 吉村長策略伝』平成27年

佐世保市教育委員会

西宮市立郷土資料館所蔵の高畑町遺跡出土木製品 —奈良時代井戸417HW と付札木簡—

森 下 真 企

1 西宮市立郷土資料館所蔵の高畑町遺跡出土木製品

筆者の勤務する西宮市立郷土資料館の所蔵する考古資料は、紅野芳雄の遺跡踏査記録である「考古小録」と彼の採集資料群⁽¹⁾に代表される寄贈品等に加えて、市内に所在する埋蔵文化財包蔵地の発掘調査による出土品が主要な収蔵品である。それらのなかでも、古墳時代前期初頭から鎌倉時代にかけて連綿と続く高畑町遺跡及び津門大塚町遺跡を核とした「津門」遺跡群と、平安時代末以降から近代にわたって西宮町の形成に直結する「西宮町」遺跡群については、西宮地域の歴史にとって欠かせない対象であることから、両遺跡群の出土資料の調査、整理を重点的に行っている⁽²⁾。

津門遺跡群については、遺跡群を構成する高畑町遺跡で現在9次に及ぶ発掘調査が実施されており、高畑町遺跡は古墳時代の地方の集落遺跡であると考えられる一方、一部官衙的性格を推定できる遺構や出土遺物も確認されている〔高畑町遺跡第5次発掘調査団2008〕。また、高

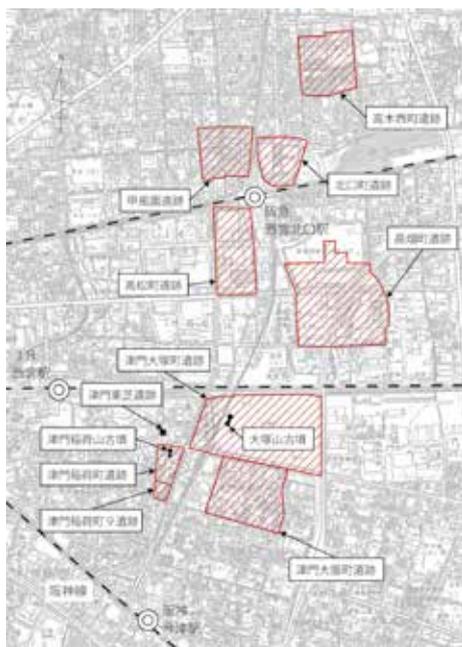
畑町遺跡の特徴は、出土遺物に多数の木製遺物が含まれていることである。それらは、田下駄、大足、馬鍬の歯、木錘等のほか、奈良時代の井戸や荷札木簡等が確認できる。

2 高畑町遺跡第5次発掘調査出土の奈良時代井戸417HW と付札木簡

本稿では、西宮市立郷土資料館に収蔵されている高畑町遺跡第5次発掘調査出土の木製遺物のうち、津門遺跡群の重要性が認識される契機となった奈良時代の井戸417HW と付札木簡について紹介する。なお、掲載写真は西宮市・西宮市立郷土資料館からの提供である。

奈良時代の井戸417HW

一辺3.4m × 3.3m の方形堀方内に、内法1.2m で、横板を4段積み上げて造られている。高さは0.6m で平面「井」字の積み上げ式横板組井



図版1 津門遺跡群（遺跡分布図）



図版2 奈良時代井戸417HW



図版3 417HW 井戸枠板（南面）

戸である。板の交差部には切り込みを設けて組み合わせている。井戸枠は、全部で16枚の横板（幅10～20cm、長さ180cm前後、厚み3～5cmのヒノキの板）で構成されており、切り込みの状況から、北面と南面の最下段を設置したのち、東西の最下段を積み、順に二段目、三段目と積み上げていく構造である。南面と西面の横板はチョウナ痕が確認できる。井戸内部の底からは平城Ⅲ期の土師器杯、須恵器杯、木簡、斎串、和銅開珎が出土している。

本井戸については検出された周囲に同時期の遺構が確認できないことから、比較的広い範囲に単独で造られたものと推定されている〔合田2018〕⁽³⁾。

付札木簡

井戸417HWからは付札木簡（長さ13cm、幅2.3cm、厚さ0.3cm）が1点出土しており、記載されていた墨書は「□□国□□郡→・方（カ）□郷日下部□□→」⁽⁴⁾と判読されている〔高畑町第5次発掘調査団2008〕。裏面の「方□郷」については、西宮市の存在する武庫郡とその近在にはみられない地名である。ただし、人名と考えられる「日下部」については、『続日本紀』などに記載がみられ⁽⁵⁾、武庫郡に関係の深い在地の豪族として日下部氏との関連が想定できることから西宮地域史にとっては極めて重要な資料となっている。ただし、「方□郷」の地名の問題点や、荷物の送り主と推定できる「日下部」が記された付札木簡が送り先でなく、送り元のそれも井戸底から出土したという事実も踏まえて、慎重に検討する必要がある資料である。

3 高畑町遺跡出土木製品の意義

高畑町遺跡は、第5次発掘調査において、地方の一般的な集落には似つかわしくない規模やつくりの奈良時代の井戸や、在地の豪族「日下部」氏を想定させるような木簡が確認された。第5次発掘調査では確認できなかった同時期の建物遺構についても平成28年度（2016）に高畑町遺跡の南に隣接する津門大塚町遺跡において、奈良時代の大型建物跡が確認されたことで、「両遺跡が一体のものとして評価されるべき遺跡」として、津門遺跡群が想定されている〔合田2018〕。平成28・29年度（2016・2017）に

行った高畑町遺跡第9次発掘調査で古墳時代の堅杵や鍬、泥除、田下駄、横槌、編台、紡錘車、糸巻軸、木錘、矢形、作業台、扉、壁板材などが一括して出土している〔森下・田之上2017、森下2018〕。

これらのことから、高畑町遺跡出土木製品の意義は、①第9次調査の出土木製品からは、「高畑町遺跡の居住者として、律令制下で里長クラスの官僚に生長した豪族の先祖を想定」〔上原2018〕でき、②第5次調査の出土木製品からは、武庫郡大領である日下部氏との関連の可能性が想定できる点にある。

合田氏により推定された高畑町遺跡を核とする「津門遺跡群」の出土資料の個々の検討を慎重に行うことで、従前よりよくわからなかった西宮地域の古代の姿の一端が明らかになる可能性があり、今後の調査研究が望まれる。

註

- (1) 紅野芳雄は、大正6年（1917）から昭和13年（1938）まで、西宮・近畿地方一帯を踏査し、遺跡の記録を残した。
- (2) 発掘調査からの予察としながら、合田茂伸氏により「津門遺跡群は「日下部」木簡が代表する古代郡衙遺跡であり、「西宮町遺跡群」は西宮戎神社を戴いて平安時代末に出現する中世商業都市遺跡と考える。」との推定がなされている〔合田2018〕。
- (3) 同様の事例として、滋賀県信楽市の北黄瀬遺跡第2次調査出土の井戸が指摘されている〔合田2018〕。
- (4) 奈文研051形式
- (5) 『続日本紀』（天平神護二年（766）九月壬申条）「撰津国武庫郡大領従六位上日下部宿禰清方献銭百万正相樽一千枚。授外従五位外」

参考文献

- 上原真人、2018年、「高畑町遺跡出土の木器」、『新発見・西宮の地下に眠る古代遺跡』、大手前大学史学研究所・西宮市教育委員会合同シンポジウム
- 合田茂伸、2018年、「発掘調査から構成する西宮地域史」、『新発見・西宮の地下に眠る古代遺跡』、大手前大学史学研究所・西宮市教育委員会合同シンポジウム
- 高畑町遺跡第5次発掘調査団、2008年、『高畑町遺跡発掘調査報告書』
- 西宮市、2022年、『新西宮の文化財（改訂版）』
- 森下真企・田之上裕子、2017年、「兵庫県西宮市高畑町遺跡発掘調査速報」、『古代学研究』第213号
- 森下真企、「古墳時代集落としての高畑町遺跡」、『新発見・西宮の地下に眠る古代遺跡』、大手前大学史学研究所・西宮市教育委員会合同シンポジウム

西宮市立郷土資料館学芸員

村野藤吾による関西大学千里山キャンパスにおける アンビルト建築について

西田 貫 人

1. はじめに

建築の歴史を振り返ると、ウラジミール・タトリンの「第3インターナショナル記念塔」やブルーノ・タウトの「生駒山嶺小都市計画」、ザハ・ハデイド・アーキテクツの「新国立競技場」など、実現されなかった建築の構想、提案が多くある。技術的、経済的な要因や、社会的な制約などから実現されなかったそれらの計画案や、未来を思い描いて描かれた提案は、夢があり刺激的なものや、描いた人の思想を強く反映しているものが多い。

村野藤吾は多作の建築家であり、関西大学千里山キャンパス内においても40近くの建物を設計している。村野・森建築事務所の設計図面は、現在、京都工芸繊維大学美術工芸資料館に「村野コレクション」として収蔵されている。また、同館所蔵の50,000点を超える設計図面の中に、関西大学千里山キャンパスに関する資料が2,180枚存在しており、この資料の中に実現されなかった計画案がいくつもある。

今回は、その中から村野が千里山キャンパスの設計への思考が強く反映されているのではないかとと思われる2案を紹介する。

2. 関西大学と村野藤吾

1922年に大学令により、昇格をはたした関西大学は、千里山に学舎を構えた。中央には東洋一と称されたグラウンドを見下ろすように大学



図1 大学本館

本館、図書館、豫科校舎などが建てられた。戦後、新制大学への転換後の著しい学生増加に対して教室など設備の拡充、また、施設面での大学院の充実を目指すものとして拡充五カ年計画が立てられ。この計画では、第1学舎の新築や第2学舎の増築、大学ホール・研究室の新築、図書館の増築などに続き、秀麗寮の購入・増築、尚志館の増築、高等学校の千里山移転・新築、天六学舎の増築など多方面に及ぶ大事業となり、これ以降、村野は関西大学の学舎建設に大きく関わることになった。

3. 関西大学記念館移築工事について

「関西大学記念館移築工事」と名付けられたこの計画案は、大学本館のシンボルとなっていた角にある八角形の塔部分の部材を用いて、記念館を作るというものであった。

大学本館は、当初「関西大学千里山校舎設計略図」なるものに基づいて新たに作られるはずであった。しかし、1923（大正12）年に火災によって校舎建設用に保管していた材料が焼失したため建設が頓挫し、もともと住友合資会社の総事務所（東区北浜5丁目）であった建物を、同社の社屋新築に伴って関西大学が譲り受けた。この本館は、千里山に移築後、式典や音楽会など様々な催し物に使用されていたが、拡充

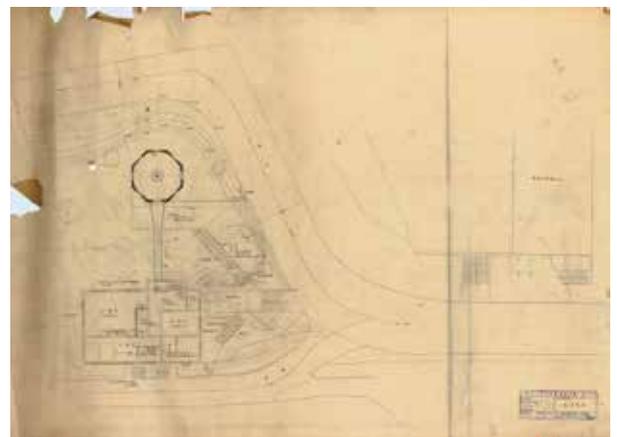


図2 「関西大学記念館移築工事 1階平面図」
(京都工芸繊維大学工芸資料館所蔵 AN. 5159-78)

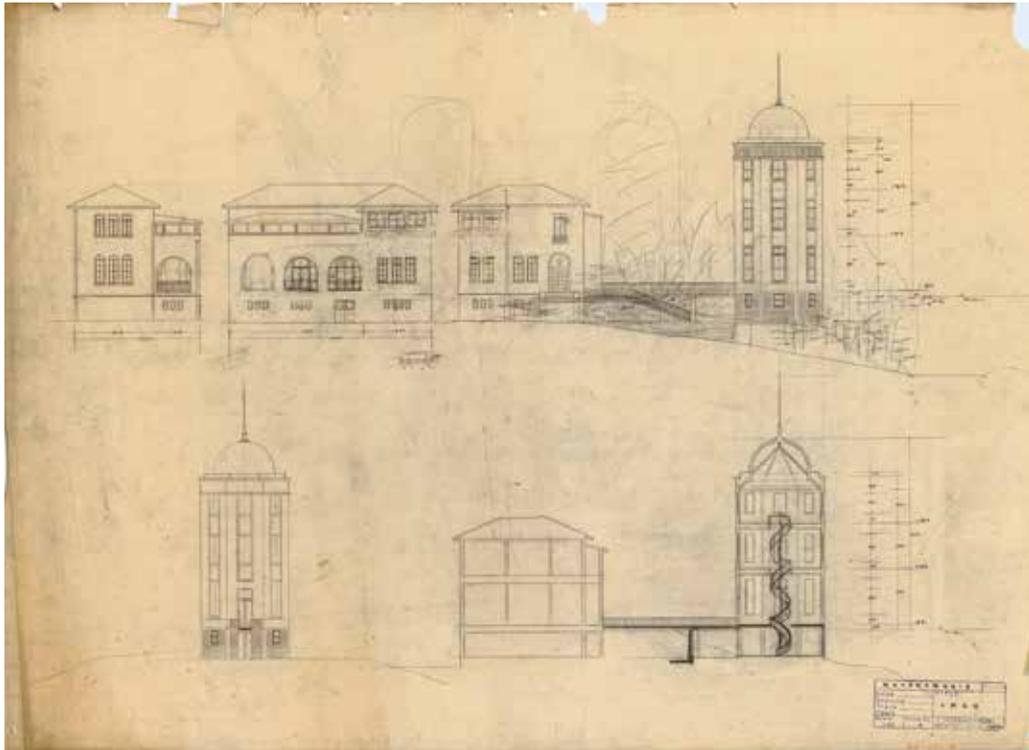


図3 「関西大学記念館移築工事 立断面図」(京都工芸繊維大学工芸資料館所蔵 AN. 5159-80)

五カ年計画による第1学舎建設にあたり、老朽化して危険な場所もあったため、1954(昭和29)年に撤去された。取り壊した後、記念塔として用いられる部材は、しばらく残されていたが、この計画案がなくなるとともに処分されている。

この計画案に関する図面は、4枚と少ない。変遷を追うようなエスキースの段階はないが、どれも明示的に書かれている。AN.5159-78の平面図(図2)には、クラブハウスの1階に診療室や休養室、薬局などの記載があり、保健管理センターに改修されている。記念塔はクラブハウスの西側に計画され、クラブハウス北西隅に玄関ホールが設けられており、連絡ブリッジを用いて接続されている。法文坂を歩いている途中では少し見えづらい位置にあるが、昔の正門側から登ってくると一番初めに目に入るシンボルのような建物として計画されていたのだろう。

AN.5159-80(図3)では、立面図と断面図が書かれている。大学本館時には、3階建てであったが地階部分が増築されている。この地階部分は、構造部分の柱が露出し、その柱の間をタイルまたはブロックで埋める村野らしいデザインが見られる。また、アクセスについては、連絡ブリッジからだけでなく地盤面の高さにも

入り口が設けられている。この記念塔部分は、大学本館時は応接室として利用されていたが、計画では中心に螺旋階段があるのみで用途に関しては何も記載されておらず純粹に塔として、また大学のシンボルとして用いる計画となっている。

この計画は、図面の書き込み具合から、実施に向けてかなり具体的な検討が行われている。計画が中断した理由ははっきりしないが、この時期は、学舎の拡充が目覚ましいことから、実用的な用途を持たないこの計画は、後に回されたのではないかと考えられる。

4. 関西大学将来計画試案について

この計画案は、「関西大学将来計画試案」と



図4 関西大学将来計画試案 イメージ



図5 「関西大学将来計画試案 配置兼平面図」
(京都工芸繊維大学工芸資料館所蔵 AN. 5164-02)

名前が付けられており、1967（昭和42）年に書かれたものである。図面の枚数は12枚あり、うち5枚がコピーされたものとなっている。

概要は、高層棟の本部及総合研究所と扇形のホールを中央グラウンドがあった場所に建てる計画である。1968（昭和43）年に社会学部研究室が竣工した後のものであり、この後に竣工される学舎は、第4学舎2号案研究棟と岩崎記念館、関西大学第一高等学校校舎1号館の3つであり、千里山キャンパスでの村野の計画において後期にあたる。

この図面が描かれた背景として第3グラウンドと第4グラウンドの開設が考えられる。「関西大学百年のあゆみ」には、「昭和34年から42年まで取得できた総合グラウンド用地のうち2万4442㎡余りを第一工事分として整地し、昭和45年10月に第3グラウンドとして完成させた。その後、第4グラウンド建設の話が昭和51年秋ごろに具体化し、昭和53年8月から翌3月まで基礎造成工事を行い、昭和55年11月から昭和56年8月まで仕上げ工事を施し、昭和57年4月にオープンさせた。完成した第4グラウンドは第4種陸上競技場の公認を受けた。」と記載されていることから、中央グラウンドの必要性が低下し、千里山キャンパスの中心にグラウンドに代わる活動拠点を計画するため、この図面を書いたのではないだろうか。また、AN.5164-01の図面には第3グラウンドと第4グラウンドが書き込まれており、グラウンドが完成する以前から村野はこの話を知っていたと考えられる。

AN.5164-02（図5）の図面では、校門が大きなものになっており、中央グラウンド部分



図6 「関西大学将来計画試案 屋上平面図」
(京都工芸繊維大学工芸資料館所蔵 AN. 5164-14)
一部抜粋

の南半分を庭園にし、北半分に地上20階の本部及び総合研究所と5000人が入る大ホールが書かれた平面図となっている。この大ホールはもとの地形にあわせて扇状に計画されており、スタンドがあった場所を客席に変え、既存の様子を取り入れた計画となっている。また、グラウンドに沿って曲がっていた法文坂も直線的な通路になっている。AN.5164-14（図6）は、「屋上平面」というタイトルがつけられており、本部及び研究所とホールの伏図が書かれている。この図では、大ホールの屋根を屋上庭園とし、その扇沿に4カ所の吹き抜けが設けられている。また、扇状の屋上庭園の親骨部分は法文坂の高低差を処理しつつ本部にアクセスしている。AN.5164-15（図7）の断面図には、本部は、地下2階、地上20階で高さが約70mと書かれている。本部の地盤面を基準にするとホールも地下2階まであり、高さは本部の5階の高さとなっている。このホールの屋上は、第1学舎のグラウンドラインにあわせて書かれ第1学舎1号館の前に広場ができるような形となっている。また、もともと少し高い位置にあったグラウンドの位置には点線が引かれており、計画された本部前の庭園は校門からまっすぐ進む通路の高さとあわせられていることから、切土による整地が行われている。AN.5164-02では、大学全体の植栽が細かく書き込まれており、外構計画についても重視していたことが読み取れる。

計画の図面には、建物は概形しか書かれておらず、ファサードのデザインについて詳しいことはわからない。しかし、いずれも敷地全体との関係をみる図面となっている。村野は、しばしば以前の雰囲気踏襲し、可能な範囲内で自

分の意図を加えることで、全体をくずさず、まとめ上げる設計を行う。敷地全体が書かれているのは、キャンパスで一番大きな建物となることもあり、その建物が建つことによる全体の印象を見ていたのではないだろうか。また、もともとあった中央グラウンドが学生やキャンパスの中心として、シンボルとなっていたことから、スタンドを客席に代えるといった用途変更を行いつつ保存するとともに、新たな学生活動の中心となる場所を作ることで、その存在の保存も行いたかったのではないかと考えられる。

5. さいごに

小林秀彌著の「大学キャンパス計画」では、大学をシンボライズする意味で、大学構内ならびに近隣から眺めるような高い塔をその中心部に建てるということが普通というような時代があったとされている。このような塔は、大体大学のシンボルとしての景観または塔に登って景観を楽しむというのが主な用途とされ内部は縦動線のみとなっていることが多く見られる。そこで実用的なキャンパスの塔として高層ビルが建てられるように変化したと述べている。これについては、今回の2つの計画案からも同様の変遷がみられる。また、このような実用性を持つ高層の校舎としてはピッツバーグ大学の「勉学の大聖堂」(42階)やエール大学の「クライ

ン・タワー」(17階)などがある。また、日本では丁度この図が書かれた年に最高高さが65mの学校建築として「早稲田大学理工学51号館」が1967(昭和42)年3月に竣工しており、早稲田大学出身の村野には印象的な計画であったのではないだろうか。

千里山キャンパスは、マスタープランのない中で計画されてきた。この「関西大学記念館移築工事」、「関西大学将来計画試案」から、村野は千里山キャンパスにおいて大学のシンボルとなるような建築物を必要としていたことが窺える。また、村野にとって中央グラウンドという形でなくとも、キャンパスの中心には学生活動の拠点となるような存在を配置すること、各学舎ゾーンの中心に、その存在が出来ることで、扇の要のようにキャンパス全体をまとめようとしていたのではないかと考察する。

【主要引用・参考文献】

橋寺知子「関西大学年史紀要28巻/関西大学本館について」2021年、西田貫人「2017年度3月修士論文/京都工芸繊維大学所蔵「村野コレクション」から見る関西大学の建築—外部空間の構成手法について—」、神子久忠 編集「村野藤吾著作集 全一卷」鹿島出版 2008年、関西大学百年史編纂委員会「関西大学百年史資料編」関西大学 1996年、関西大学百年史編纂委員会「関西大学百年のあゆみ」関西大学 1986年、小林秀彌「大学キャンパス計画」彰国社 1978年

関西大学博物館 学芸員

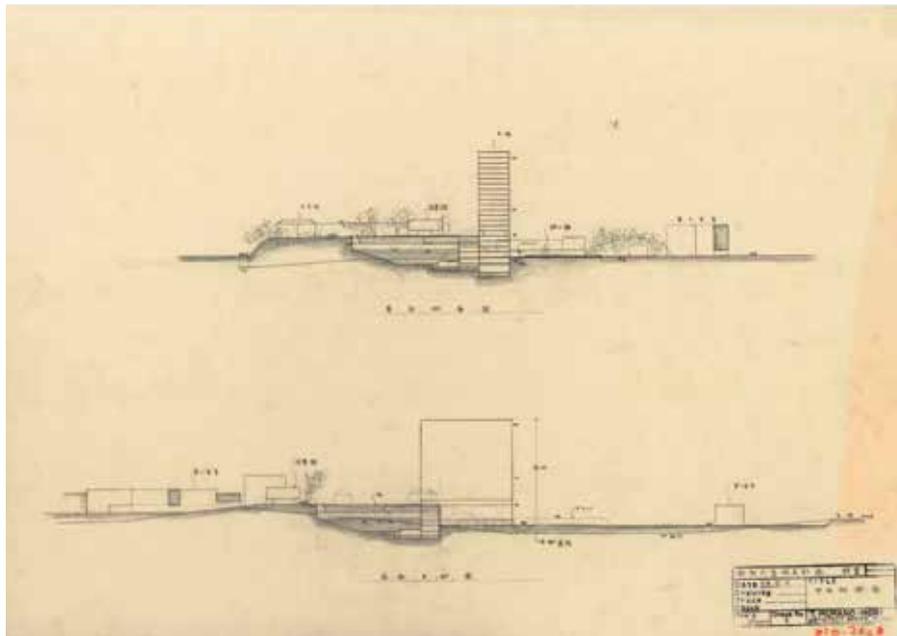


図7 「関西大学将来計画試案 中央部断面」
(京都工芸繊維大学工芸資料館所蔵 AN. 5164-15)

◆ 博物館だより

◇2021年度関西大学博物館 開館日数・入館者数

	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	計
開館日数	24	11	18	26	2	8	26	24	23	19	16	19	216
入館者数	363	48	152	220	619	25	244	772	435	131	187	549	3,745

◇関西大学博物館テーマ展「高松塚古墳壁画発見50周年」を開催

2022年3月1日から6月30日にかけて高松塚古墳壁画発見50周年を記念したテーマ展を開催しました。関連催事として、3月12日に講演会を開催し99名の方に参加いただきました。

◇関西大学大学昇格100年記念事業 記念展示会「真理の討究 学の実化」を開催

2022年6月5日、関西大学は大学昇格100年の佳節を迎えました。大学昇格100年記念事業として、博物館では記念展示会「真理の討究 学の実化」を4月1日から6月30日まで開催しました。会期中には、5,228人の方に来場いただきました。

展示会では、大学昇格にむけての本学の取り組み、その陣頭指揮を執った山岡順太郎総理事の事績、千里山学舎の開設、千里線と沿線開発、学歌の制定、学生生活などの現在に続く原点を8章にわけて、資料やパネルで紹介しました。



◇今年度も資料の取扱いを実践的に学ぶ「博物館実習実践研修会」を開催しました。

河内國平氏・河内晋平氏・高見國一氏による日本刀研修（6月18日）、小畑弘己氏による土器圧痕研修（6月29日）を実施し、2回の講座で合わせて58名の方に参加いただきました。

◇2022年度夏季企画展「関大と刀匠國平」を開催

2022年7月18日から10月10日にかけて、関西大学出身の刀匠、河内國平先生の軌跡と40点を超える刀剣を展示しています。9月10日に関連イベント「神田伯山/河内國平『刀剣と講談』」を開催し、374名の方に参加いただきました。



◇夏の恒例行事「キッズミュージアム」は、少数での講座形式として8月3日・4日に実施しました。

「拓本」「石斧」「消しゴムはんこ」「ブロックで学校を作ろう」の4つの講座を行い、全体で47名の小学生に参加いただきました。

．．． 編集後記 ．．．

表紙の「鳩の彫刻」

70年前の1952年に岩崎記念館別館（旧大学院ホール）が竣工しました。その蔦で覆われた建物の2階の北東角には、あたかも本物の鳩が佇むような姿で鳩の彫刻が取り付けられていました。建物は建築家村野藤吾の設計によるもので、鳩の彫刻も村野の手ほどきにより作られたものです。建物は、2005年に解体されましたが、鳩の彫刻は庇、照明器具などとともに簡文館に移設されました。



2020年3月末にて、第8代博物館長 西本昌弘文学部教授が、退任いたします。

在任中の関係各位のご支援ご厚情に感謝いたします。4月からは、原田正俊文学部教授が博物館長に就任いたします。前館長同様、ご指導ご鞭撻を賜りますよう、よろしくお願いいたします。